

図3・1 プレータスとリシンによる活動の発生
(Bratus & Lishin, 1983, p. 44)

(…) 活動の継起のなかで障害がおこる可能性のあるのは、二つの点である。ひとつは、N・Aにおいて、欲求がそれまでの活動の手段によってみだされないうとき、もうひとつは、反対に、A・Nにおいて、既存の操作的・技術的手段がそれまでの欲求に対応していないときである。どちらの事例でも、何らかの不安定な状態がおこり、それまでの願望がその対象を失い、自分でもわからない、はつきりと記述できないものを(ときにはきわめて熱烈に)望んでいる状態と言ってもよいだろう。

この不安定な、一時的に対象を欠いた願望という奇妙な状態を、欲求状態と呼ぶことができよう(…)。(Bratus & Lishin, 1983, p. 43)

この記述から直ちに思い出されるのは、ダヴィドフとジンチェンコが先に定式化した探索のパラドックスの概念である。欲求状態の本質的特徴は、主体が競合する二者択一に直面し、自分の努力の方向を決められないことである。新しい活動は、三つの領域を経て現れる。(1) 欲求状態の領域、(2) 動機形成の領域、(3) 欲求と活動の転換の領域 (Bratus & Lishin, 1983,

しかしながら、欲求状態は長くは続かない。遅かれ早かれ、何らかの対象と出会ったり、対象を発見したり、活発な試行行為を行ったりするようになる。この対象は、特定の欲求状態に合致し、欲求状態を質的に異なる地位——対象化された欲求、すなわち、その対象もしくは動機を見いだした欲求の地位——に引き上げることになる。次に、発見された動機を通して、欲求が動機を刺激する。その過程で、欲求が再生産され、(…)いくらか変容され、以前の活動サイクルとは異なる新しい活動サイクルへと押し進めるなどする。つまり、転換の継起が生じるのである。(Bratus & Lishin, 1983, pp. 43-44)

ここできわめて重要なコメントを二つしておく必要がある。まず、欲求状態における対象は、恣意的あるいは偶然的に競合しているのでは全くないということである。見たところ、表面上は偶然的で関連のない「二者択一」「選択」であっても、そこには、所与の社会経済的体制におけるあらゆる対象がはらむ、歴史的に規定された固有の矛盾が横たわっている。資本主義においてどんな対象にも機能している固有の内的矛盾とは、抽象的であると同時に具体的であり、交換価値であると同時に使用価値でもあるという商品の二重性格である。このように、欲求状態は、同一の対象の相互排除的かつ相互依存的な二つの側面に直面したときの主体の困惑に根ざしている。

もうひとつの重要なコメントは、ブレータスとリシンの措定した新しい活動の発生の「自動性」についてである。著者たちは、欲求状態は「長くは続かず」、いずれは新しい変換のサイクルによつて

置き換えられると主張している。「しかし、これは必ずしも正しくはない。」まず、欲求状態がときに
は実際に長く続くということ、そして、著者たち自身が深く研究しているアルコール中毒のような
「代用活動」について語るまでもなく、欲求状態がさまざまな形態の剝奪感、消極的態度、引きこも
りを生み出すということ論じるにたる十分な証拠がある。しかし、もっと重要なのは、欲求状態が
解決されることになっていくしかたである。ブレータスとリシンの議論では、それはきわめて容易で
努力いらすの過程であるかのように聞こえる。「遅かれ早かれ、何らかの対象と出会ったり、対象を
発見したり、活発な試行行為を行ったりするようになる」というのだから。しかし、そうした「遅か
れ早かれ」生じる選択のほとんどは、実は、新しい活動の生成ではなく、古い退行的な活動形態の
「再発見」なのである。その場合、人生は、上昇する螺旋（スパイラル）ではなく、円環（サークル）
のかたちで進んでいくことになる。明らかに、このかたちでも、発達への目に見えない寄与はある。
しかし、これは私たちが真に探し求めているものではない。

欲求状態には自動性など存在しない。欲求状態は、退行を通じて「解決される」こともあれば、拡
張を通じて解決されることもある。後者の過程の構造を明確化するために、最近接発達領域のカテゴ
リーをくわしく吟味することにしよう。

6 最近接発達領域

最近接発達領域についてのヴィゴツキーの有名な定義は、以下のようなものである。

それは、個別の問題解決によつて決定される現実の発達水準と、大人の指導の下で、あるいはより可能な仲間との協同による問題解決を通じて決定される潜在的な発達水準とのあいだの距離である。

(Vygotsky, 1978, p. 88)

ヴィゴツキーによれば、最近接発達領域は「明日には成熟するが今日は胚の状態」、すなわち発達の「つばみ」ともいえる機能を指している (Vygotsky, 1978, p. 86)。ヴィゴツキーは、霊長類や他の動物は最近接発達領域をもつことができないと主張した。他方、人間の子どもは、「自分の可能性の限界を超えて進む」ことができ、「集団的な活動のなかでよりいっそう多くのことを行うことができる」(Vygotsky, 1978, p. 88)。

ヴィゴツキーは、教授を、最近接発達領域を開発するための主要な手段だとみなしていた。

したがって、唯一よい教授とは、発達に先行し発達を先導する教授である。それは、成熟に狙いを定

めるのではなく、成熟機能に狙いを定めるのでなければならない。(…) 教授は、過去ではなく未来を志向しなければならぬ。(Vygotsky, 1978, p. 88)

ヴィゴツキーは、モンテッソーリの「敏感期」の考え方を教授にとっての適切な出発点としてとりあげている。

たとえば、4歳半とか5歳で書くことを教えられた子どもは、「爆発的に書く」こと——それより2、3歳年上の子どもにはまねのできない、書き言葉のおびただしい想像的使用——によって反応する。これは、対応した機能がまだ十分成熟していないときに教授が強い影響を与えることができるということをも明確に示している例である。(Vygotsky, 1962, p. 105)

最近接発達領域の概念は、この数年間、特にアメリカにおいて、ルネサンスを見ている。この概念のよくある解釈と適用のしかたのひとつは、それをさまざまな型の「知能のダイナミック・アセスメント」(Brown & French, 1979; Day, 1983 参照) にとつての原理として使うことである。

これとは別の解釈としてよくなされるのは、教授的援助を与える社会的な状況や環境を創造するための原理として、最近接発達領域をとらえることである。そうした状況や環境のなかで、子どもたちは、共同の問題解決と相互作用を通じて新しい技能を新しいやり方で獲得していくことができる。「足場組み (scaffolding)」(Wood, Bruner, & Ross, 1976; Wood, 1980 参照) の概念は、この流れの

解釈の産物である。キャズデン (Cazden, 1981) の子どもの言語獲得の仕事もそうであり、ロゴフとワーチ (Rogoff & Wertsch, 1984) が編集した重要な本に収められている諸論文もまたそうである。しかしながら、こうしたよくある解釈のいずれも、ヴィゴツキーの見解を十分正当には扱っていない。ダイナミック・アセスメントという解釈について言うなら、ヴィゴツキーが「実際はそれよりもっと広い問題に向けて語っている」ということを容易に指摘できる (Day, 1983, p. 164)。しかし、もう一方の足場組みの概念も、やはり不当に狭い。ペグ・グリフィンとマイケル・コールは、この解釈には二つの重大な弱点があると指摘している。第一に、足場組み（あるいは「フォーマット」を創ること、Bruner, 1985bを参照）は、個別の技能や行為を獲得することを指しており、長期にわたるひとまとまりの活動全体の出現を指してはいない。それは「きわめて空間的なメタファーであり、全体を構成していくさいの時間的な側面については、生きた過程の残余、未分析の側面として放置してある」(Griffin & Cole, 1984, p. 48)。第二に、足場組みの考え方は、所与のもの獲得に限定されている。

足場組みのメタファーは、子どもの創造性という問題に手をつけないでいる。大人の援助が子どもの能力と反対の関係にある場合、そこには強い意味での目的論が存在する。そこでは子どもの発達が大人の獲得している分別によって閉じこめられているのだ。Nope'd (最近接発達領域——引用者) を次のステップの準備と解釈することは、私たちがこれまで行ってきた仕事も含め、どれも同様の懸念をもってある。(Griffin & Cole, 1984, p. 47)

この自己批判を含んだ定式化は、格別に重要である。グリフィンとコールは、最近接発達領域の拡張的な見方のスケッチを試みている。レオンチェフ (Leont'ev, 1981) とエリクソン (Erikson, 1977) の分析の流れに沿って、彼らは、子どもの発達を、存在論的に主導的あるいは支配的な活動から他の主導的・支配的活動への移行として見ている。たとえば、遊びから学習へ、フォーマルな学習から仲間との共同の活動へ、仲間との共同の活動から労働へ、といった移行である。さらに彼らは、こうした移行が自動的に生起し固定した普遍的順序をもつという考えには同意しない。対照的に、発達の継起にしたがう主導的活動の変化を「単一の場面のなかで示すことも可能である」(Griffin & Cole, 1984, p. 60)。たとえば、遊びの活動は、子どもたちが新しい活動に入っていくのを助ける媒介的手段となることが多い (Griffin & Cole, 1984, p. 62)。

大人の分別は、子どもの発達に対して目的論を提供しない。「これに対して」社会的組織と主導的活動は、子どもが新しい創造的な分析を発達させていくためのギャップを提供する。(…) Zooped は、子どもと子どもの未来との対話である。それは、子どもと大人の過去との対話ではない。(Griffin & Cole, 1984, p. 62)

この結論は刺激的ではあるが、著者たち自身(もちろん他の研究者は言うに及ばないが)、その意味をようやく考慮し始めたばかりだという印象はぬぐえない。これはいま引用した結論とコールの他の著作の定式化とのあいだの不一致をみれば明らかである。たとえば、ワーチ (Wertsch, 1985a) が

最近編集したすぐれた本のなかの彼の論文がいい例である。そこでコールは、最近接発達領域について、もっぱら「文化の獲得」という言葉で語っている。決して「文化の創造」ではない。彼はこの論文を次の文でしめくくっている。

文化的に適切な行動の獲得とは、子どもと大人のあいだの相互作用の過程である。そこでは、概念獲得／文化化／教育における本質的な要素として、大人が子どもの行動を指導する。(Cole, 1985, p. 158)

同じ本の中のシルヴィア・スクリブナーの論文は、こうした考え方をいっそうおし進めたものになっている。

子どもは、記号システムを同化する存在であり、内化の過程を通じて高次機能を発達させる。一方、歴史のただなかにいる大人は、記号システムを使用するだけでなく、創造し精緻化する存在である。同化の過程と創造の過程は同じではない。(Scribner, 1985, p. 130)

スクリブナーは、記憶の発達に関するヴィゴツキーの議論に言及することによって自分の立場を擁護している。しかし、それが、新しい文化的な手段と形式を創造する子どもの潜在的な能力の問題とどう関連しているのかは、はっきりしない。おそらく、この点にもっと関連のあるものとしては、ダヴィドフおよびポディヤコフ (Davydov, 1977; Poddyakov, 1981) の知見があげられるだろう。そこ

では、就学前の子どもでさえ真の理論的一般化を形成するとされている。もつとも、それは、まだ言語的形態では現れず、対象と結びついた動作的な表現形態および図像的な表現形態をとるのだが。

実際ヴィゴツキーも、創造的な過程については、(芸術心理学に関する初期の仕事を除いて)ほとんど語っていない。ヴィゴツキーの最近接発達領域の概念は、それ自体、発達させることが必要なのである。ヴィゴツキーの打ち立てた文化—歴史学派は、現在まで、文化のツールおよび記号システムの獲得、同化、内化を中心に研究を進めてきた。こうしたツールや記号システムがいかに創造されるかは、主に、将来の問題として扱われてきた。ひとつの重要な例外は、V・S・ピプラーの理論的な仕事である。彼は、ヴィゴツキーの内化の概念に潜む創造的な要素を次のように明らかにしている。

(…) 社会的関係が意識に浸透する過程(…)は(…)拡張され相対的に独立している「文化のモデル」、つまり、しつらえられた文化的現象を、ひとりひとりの人間のなかに融合され凝縮された思考の文化、つまり、ダイナミックな文化へと転換する過程である。客観的に発達した文化は、内冒において、主観的な規定を与えられる。それは未だ実在していないが、可能性として存在している新しい文化のモデルであり、創造性、未来志向的な形態として立ち現れる。ここでは、関係性が反転する。内冒は、「内化の現象」として理解されてはならない。そうではなく、思考を「外化」する意図として、そしてまた、未だ客観的には現れず外的・社会的に展開されてもいないが、確かに存在する新しい文化の萌芽、概念のなかに集約された萌芽として、理解されねばならない。社会的関係は、内冒のなかにただ浸透しているのではない。それは、内冒のなかで、ラディカルに転換され、新しい(まだ現実化していない)意味、

外的な活動およびその客観的な物質化への新しい方向づけを獲得するのである。(…)しかし、その後、(…)内言(およびひとり対話の初期形態)は、思考(活動)の文化・歴史的モデルの対話として表象されるようになる。この思考(活動)のモデルは、自分自身の「I」のさまざまな声、一種の場所取り(Posting)として機能するそうした声のあいだの議論、新しい文化的現象(知識、観念、芸術作品)の創造といったかたちで内化されている。(Biber, 1983-84, pp. 52-53)

内化から外化への変換の個人的「メカニズム」は、おそらくは、ビブラーの描く流れにしたがって進むだろう。しかし、個人的発達と社会的発達とのあいだの関係は、最近接発達領域の概念のなかでも、依然として根本的な問題である。グリフィンとコール(Griffin & Cole, 1984, pp. 48-49)は、「最近接発達領域が「未来のモデル、過去のモデル、そして両者のあいだの矛盾を解決する活動を含む」と強調している。しかし、この時間的なバースペクティヴは、個人的な面からのみ理解されているようである。つまり、個人がその発達の過程において、ある活動から別の活動へ移行するということがある。議論されていないのは、社会システムとしての活動それ自体がたえず発達し変化しているのか、どうか、またそれがどのようにしてなされるのか、ということなのである。

同じ活動の、古い形態と新しい形態、退行的形態と拡張的形態が、社会のなかに同時に存在する。子どもたちは、再生産的、反復的なやり方で遊ぶこともあろうが、また一方で、遊びの新しい形態と構造、遊び活動のための新しいツールとモデルを、発明し構成するのである。彼らの遊びは、しだいに消費的になり物を作ることから遠ざかっているように見えるし、また、おもちゃやゲームがピツ

グ・ビジネスになるにつれて、いつそう交換価値の側面が子どもの遊びを支配しつつあるように見える。しかし、子どもの遊びは、それほど単純で、一方向的なものだろうか。私たちの子どもたちの遊び活動の内的矛盾と歴史的パースペクティヴは何だろうか。ときどき親たちは、自分の子どもが予想した規準に合わない遊びをしていることに気づいて驚くことがある。何か新しいものが「下から」生み出されている。時には、こうした下からの発明が、遊び活動の構造を変化させる突破口となるのだ。

人間の発達とは、新しい社会的活動システムの真の生産にほかならない。それは、たんに、個人としての新しい活動——そこにおそらくは「独創的な行動（イルカの事例を思い起こしていただきたい）」の個人的創造が加わる——の獲得ではない。以上において、私は、三つのタイプの発達——個人的、爆発的、不可視的、漸進的、集团的、拡張的——を区別した。第三のタイプの発達は、直観的あるいは意識的な習得、すなわち主体の主体化を必要とする。主体化の道具としての最近接発達領域の概念は、この第三のタイプの発達の文脈において意味をもつ。もう少し正確に言えば、個人的、爆発的タイプと不可視的、漸進的タイプは社会的な意味さという尺度からすれば、ただ集团的、拡張的タイプを通じて間接的にのみ、意図的に影響を与えられたり方向づけられたりできるにすぎない。

最近接発達領域の暫定的な再定式化が、今や可能である。最近接発達領域とは、個人の現在の日常的行爲と、社会的活動の歴史的に新しい形態——それは、日常的行為のなかに潜在的に埋め込まれているダブルバインドの解決として集团的に生成されうる——とのあいだの距離である。

クラウド・ホルツカンプは、最近、ウィゴツキーの概念把握を知らずにとと思われるが、人間発達についてこれとかなり似た見解を展開している。彼によれば、資本主義において個人的に経験されるあ

らゆる実存主義的な脅威と制限のなかに埋め込まれながらも、「支配的な部分的利益に抗して、共同的な自己決定の、一般的利益を実現する」という方向で直接に協働することを通じて、個人的な主観性の限界を超える」(Holzkamp, 1983, p. 373) という「第二の選択肢」がある、という。ホルツカンブは、ここで、「二重の可能性」の原理について語っている。彼はさらにこの見解を「可能性の領域」と「可能性の一般化」という概念によつて具体化する。前者は「行為の一般的社会的可能性と、それらの可能性を実現し制限し神秘化する個人に特殊な方法とのあいだの関係」(Holzkamp, 1983, p. 548) を指している。他方後者は、個人が、同一の「典型的なタイプの可能性の領域」内の他の人びととの関係において、また社会的可能性との関係において、自分の行為の個人的可能性を把握し理解することを意味している (Holzkamp, 1983, p. 549)。

しかし、最近接発達領域を通つてゆく道程でとられるべきステップについて、たとえ試案的なものであれ、もつと詳細な分析を行うことが必要である。プレートラスとリシンが提案した三つの下位領域——欲求状態の領域、動機形成の領域、欲求と活動の転換の領域——を思い起こしていただきたい。これまでの議論に照らしてみれば、この三つのステップでは不十分なことがわかる。とりわけ欠落しているのは、欲求状態のダブルバンドへの転換、つまり、その解決のためには質的に新しい道具がどうしても必要とされる、そんな矛盾への転換、なのである。必要なステップを具体化するために、以下では、最近接発達領域の例を文学作品に見ていくことにしよう。

7 最近接発達領域を渡る道程としての『ハックルベリー・フィンの冒険』

ここでとりあげる事例は、マーク・トゥエインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（1950年「初版は1885年」）である。物語の初めにおけるハックルベリー・フィンの支配的活動は、放浪生活である。一方では、冒険好きの中流階級の少年トム・ソーヤーとの交わりを求めつつ、他方では、黒人奴隷のジムのような貧しく虐げられた人々との交わりを求める放浪生活である。この放浪生活は奴隷制の文化のなかで生じている。ハックは、無難な中流階級の家庭生活に適應する機会を与えられていたのだ。が、しばらくして、その選択肢を捨てる。この活動の構成要素すべての内部にそなわる第一の矛盾は、個人的な放浪者の私的自由と、放浪者の直接の文化的文脈を支配する公的不自由とのあいだの矛盾である。後者は、中流階級的なソフトな飼育慣らし、あるいは權威による暴力的な抑圧のかたちで、ハックを脅かしてもいる。

ハックの生活活動のこの最初の形態は、図3・2で描写できる。

物語は、ハックが父親にいやがらせを受け脅かされることから始まる。ハックは、自分が死んだと見せかけて父親のもとを逃げ出し、ミシシッピ川の中の島に住みつく。そこで彼は逃亡奴隷となつた旧友ジムに出くわす。ハックは、二人は友達なのだから、誰にもジムのことを言わないと約束する。しばらくのあいだ、二人はその島で生活する。こうして事が動き出す。

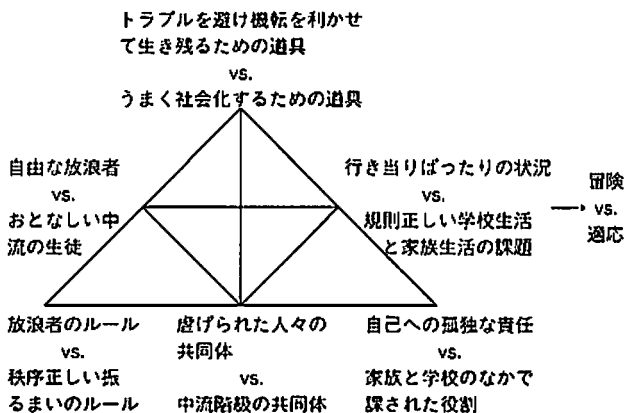


図3・2 ハックルベリー・フィンの生活活動の第一の矛盾

あくる朝、おらは、退屈で眠くなっちまったんで、何か目のさめるようなことをしてえと思つた。これは、欲求状態の表れである。取りうる選

人目につかねえように川を渡つて、町の様子をう

かがつてこよやかなつて言うと、ジムも、そいつ

は面白いと言つた。でも、行くなら暗いうちに

行つて、よく気をつけなきゃいけねえ、と言つた。

(p. 54/上 pp. 107-108)

ハックは、ジムが執ように追われていることを知る。そこで二人は、夜のあいだは筏を浮かべ、昼間は隠れて、その大きな川を下っていく。しかし、これはジレンマを解決する「徹底した行為」ではまだない。それはむしろ、状況に強いられる、どちらかといえば無目的な反応である。彼らは川を下りつづけ、ようやく奴隷制が廃止された地域に近づく。ここで初めて、ハックは彼の放浪の活動が質的に新しい主体——もはや自分ひとりではなく、自分とジムの二人三脚なのだという——を自覚する。T・S・エリオットは、この本への序文で、「ハックは実際、ジムなしでは完全でない」(Eliot, 1950, p. xi) と指摘している。

この新しい要素は新しい種類の活動を表している——それは古い活動をかき乱し、隠れた内的矛盾をいっそう深刻なものにする。こうして、物語は、活動システムのなかに持ち込まれた新しい要素とその古い要素とのあいだの第二の矛盾の段階に入っていく。この新しい協同的な主体という要素は、

古い第二の道具、すなわち「他人のトラブルに巻き込まれるな」という回避のモデルと鋭く対立する。第二の矛盾を純粹なダブルバインドのレベルに持ち込むのは、ハックの非妥協的な正直さである。

ジムは、もうすぐ自由になれると思うと、からだじゅうがガタガタ震えて熱病にかかったみてえだと言った。じつを言うと、おらのほうでも、ジムがそう言うのを聞いて、からだじゅうがガタガタ震えて熱病にかかったみてえになった。だって、ジムがもう少しで自由になるってことが、はっきり分かってきはじめるよ——それは誰のせいだよ、おらにきまつているじゃねえか。おれはそれで気がとがめて、どうにもこうにもならなかった。心配で休むこともできず、一か所にじっとしていることもできなかつた。それまでは、おらのしていることがどんなことか、自分ではまるで分かっていなかった。それが今やつと分かってくると、胸の中でしこりになって、じりじりとおらを苦しめはじめた。(…)

これは、ダブルバインドについての見事な描写である。矛盾は、もちこたえられなくなるまで強められている。ハックは、なんとか状況を分析し、受け入れられる解決を見つげようと必死になる。

おらは、恥ずかしいやら情けないやらで、死に
じまいたいような気がした。おらは、筏の上をせ
かせか行ったり来たりしながら、われとわが身を
賣めていたが、ジムもおらのそばを、せかせか
行ったり来たりしていた。二人ともじっとしてい
られなかった。ジムがおどりがつて、「ケーロ
だ！」と叫ぶたんびに、そのことばがおらの胸に
ぐさつと突き刺さつて、もしほんとにケーロだつ
たら、おらはみじめさのあまり死んじまうかもし
れねえと思つた。

(…) おらの良心が、ますます激しくおらを突
き上げはじめたんで、がまんできなくなつて、お
らは言つた。「うっちゃいといてくれ——まだ遅
くはねえ——最初の明かりが見えたら、岸までこ
いでいって、話すから」そう言つたとたんに、お
らはほつとして、うれしくて浮かれ気分になつた。
胸のしこりも消えてなくなつた。歌のひとつも出
そうな調子で、明かりを見張る仕事にとりかかっ

た。やがて明かりがひとつ見えた。(pp. 87-88/
I pp. 164-166)

そこで、ハックは実際に、岸に向かってカヌーをこぎ始める。ハックがこぎ出すとき、ジムが彼に向かつて言う。

「あつしがうれしい叫び声を上げるのも、もうすぐだ。そしたらあつしは、これもみんなハックのおかげだつて言うだ。おらは自由の身になつたが、ハックがいなかつたら自由にはなれなかつただべ。ハックのおかげだ。ジムはけつして忘れはしねえ、ハック。おめえさまのような仲間はこのジムは出会つたことがねえ。それに今じゃ、おめえさまがジムのたつたひとりの味方だ」

おらは、ジムを密告しようと思いつめて、カヌーをこぎ出そうとしていたが、ジムのこのことばを聞くと、なんだか、すっかり出鼻をくじかれたみてえになつた。それでカヌーの出足もおそく

ここでハックは初めて、ためらいと小休止の段階に入る。その後、ジレンマを解決するため、徹底した行為が始まる。ハックは、すぐに、新しい対象と助機——共同の自由——へ導いてくれる新しい第一の道具（病気の家族がいるという嘘）を見つける。第一の新しい道具としての嘘は、（子どもキャンペーンでの手紙のように）特殊な道具、スプリングボードで、まだ、広い適用可能性をもった一般的なモデルではない。

なり、出てきてよかったと思つてるのか、そうじゃねえのか、自分の気持ちのはつきり分かんなくなつた。五十メートルばかり進んだ所でジムが、「いつてくるけえ、ハック、ありがてえな。このジムに約束を果たしてくれた心のきれいな紳士は、おめえさまだけだよ」と言つた。

それでおらは気分が悪くなつた。それでもおらは、どうしてもやるんだ、いまさら後へは引けねえ、と言つた。ちやうどそのとき、銃を持った二人の男をのせた小舟がやってきて、そばへ舟を止めたので、おらも止めた。なかのひとりが言う。

「向こうに見えるのは何だ？」

「筏です」

「おまえの乗つてる筏か？」

「そうです」

「上に誰かいるか？」

「ひとりだけです」

「あんな、こん晩、川曲りの上のほうで、五人

の黒んぼが逃げたんだ。おめえの筏の男は白か黒か？」

おらは、とっさに返事ができなかった。答えようと思っただけど、ことばが出てこなかった。勇気をふるって言ってしまうおうと、しばらく努力してみたが、勇気が足りなかった——ウサギほどのきもつ玉もなかった。弱気になつてるのが自分でも分かった。そこでおらはあきらめて、思いきって言つた。

「白人です」

「おれたちがいつて調べよう」

「お願いします」おらは言つた。「あすこにはとうちゃんがいます。それから、岸の明かりのある所まで筏を引っぱつていくのを手伝つていただきます。とうちゃんは病気で——かあちゃんとメアリー・アンもやつぱり病気なんです」

「ちえっ！ おれたちは急いでるんだぞ。でも、いかなきやなるまい。さあ——權をとつて、出発